



流動研究部門を去るにあたり

宮崎大学工学部教授 黒澤 宏
(前 極端紫外光科学研究系界面分子科学研究部門教授)

今、考えても不思議な出会いから始まった。東岡崎駅前のレストランで夕食を取っているところに、主幹の宇理須教授が突然現れた。流動部門の教授を探しているが、引き受けてくれる人がいない。「黒澤さん、どう?」と言われても、「えッー?? 流動って、なに??」。それ以来、大学内での合意を取るのに、小規模な地方大学ならではの問題にぶつかりながら、伊藤前所長が学部長へ直接お話くださり、なんとか予定通りに事が運んだことは、今考えれば薄氷を踏む思いの1年間であったかもしれない。お陰で平成11年4月には、分子研での新しい研究生生活をスタートさせることができた。

分子研とのお付き合いは、機器分析センター、極端紫外光実験施設の利用を通じて歴史は古く、いろいろな方々との交友もあったので、見も知らぬ世界に飛び込む気はしなかった。また、施設の方々の暖かい励ましもあり、研究生生活も順調にすべりだし、大学における各種委員会や講義の責務から逃れ、研究三昧の生活は無事にスタートを切った。当人にとっては、突然舞い込んだサバティカルである。で、何をしよう? 折角、神が与えたもうた貴重な時間であるので、無為にすごしたくない。かといって、今までの研究を継続するのも能がない。2年後に戻る大学で、残る10年間に花開かせられるような新しいテーマの足がかりをつかむことをもくろんだ。幸いなことに、NEDOの助成事業による資金もあり、分子研での特別研究費をあわせて、ナノサイズの光物性に焦点を当てた研究に取り組むことにした。とは言っても、すぐに測定に取りかかることは出来ず、装置の設計から製作を始めたに過ぎなかった。

柳田君が、修士課程から博士課程に進学したこともあり、2年間の間に、ほぼ全容の装置が立ち上がり、当初の目標に向かってのスタートが切れたことは、幸いだった。また、この研究テーマとは別に、私が分子研に移る直前に竹添君が学位を取ったので、分子研のポストクに採用していただき、宇理須教授との共同研究として、放射光励起の表面反応装置と観測装置の立ち上げに参加させていただいた。細かい問題が山積みされた研究であり、思うように進まなかったことは、返すがえすも残念であったが、それなりに新しい経験を積むことが出来たことは、竹添君にとっても良かったのではないだろうか。

研究とは別のところで、忘れられないくらい楽しい出来事もあった。それは放射光学会の開催である。若い人たちと、わいわい言いながらの準備作業をおして、親しくなれたことは何事にも代え難い。加えて、放射光関係の研究者の方々ともお近づきになれたことも。講演会が無事にスタートしたことを見届けるやいなや、受付での佐々木泰三先生たちとのワインパーティーも忘れることは出来ないできごとである。遅ればせながら、所内でお手伝いいただいた方々に、この場をかりて感謝したい。

ところで、分子研に来て最高に良かったことは、今までに出会ったことのないような種類の研究者と親しくなれたことであろう。それは茅所長とUVSORの繁政助教授である。茅所長は雲の上のような方であると想像していたのだが、たまたま同じ日に赴任したことからか、当方から見れば、「何で?」と言いたくなるほど、親しくしていただいた。また、繁政助教授には、「研究は楽しまなくっちゃー!」の

言葉を身をもって教えてもらった気がする。常日頃、「研究は趣味」と思って生活してきたのであるが、その通りの人がいたっ！て、感じである。これからもこの言葉通りの生活が出来ればと思っている。最後に、研究所のみなさんの迷惑を顧みず、当方が勝手に親しくしていただいたと思っているのかもしれないが、これからもその思いこみのママに接させてください。どうかよろしく申し上げます。